

卓球部発足時代の思い出

川 嶋 金三郎

昭和二十年代は日本にとっては勿論のこと西高にとっても大変な時代であった。敗戦後間もない二十一年二月、都立第十中学校は火災によって校舎の大半を失った。その痛手は想像に絶するものであった。

二十一年四月に第四代校長として細田先生が着任し、直ちに校舎復興に着手されたのであるが資金もなければ建築資材も手に入らない時代であるから、その苦勞は今から考えれば想像もつかない程のものであった。東京都の大半が焼野原となり、校舎建設などに都の手が回りかねるこの時期に、細田校長の復興に対する熱意に打たれたPTAが全面的に協力し、一応の復旧工事が成り復興祭祝賀式を挙行了したのは翌年の十月下旬であった。

この頃、敗戦による虐脱状態を克服した日本が、戦後日本のあるべき姿を模索しつつ政治・経済・教育あらゆる部門の改革を次々に断行していくのである。西高では、二十三年四月に都立第十中学校が都立第十新制高等学校となり、さらに二十五年一月に都立西高等学校となって今日の西高の輪郭が出来上ったことになる。(男女共学は二十五年四月から)

しかし、校舎も元の姿そのものになった訳ではなく、どうやら授業可能という程度の手ずまなものであり、現在の校舎に比べればバラックである。校内施設はすべて間に合わせの状態であるので、卓球台一台を求めるのも容易でない。この時期の或る日、卓球部創設の希望を小生に伝えたのが藤崎先生である。勿論小生も大賛成。職員会議へは藤崎先生から卓球部公認の提案がなされ、時期尚早の意見もあったと思うが、それらを説得され、部として認められることになった。それからの藤崎先生は大変なもので、用具の入手その他一切につい

て大奮斗されたのである。以後三十年間部の顧問団から藤崎先生の名前は消えたことがない。

藤崎先生をこのように動かしたのは西高二期の田中恒夫君、中田昭男君たちの卓球にかける情熱であったと思う。両君たちは毎日のように卓球台を囲み、百本二百本と打ち返しの練習に励んでいた。全身汗まみれの彼等の姿は今でも臉に浮ぶ。名選手荻村伊智朗君が卓球を始めたのはこの頃であると聞く。いつであったか久我山高校へ試合に行き、その帰途、井の頭公園を歩き乍ら荻村君に話しかけたことがある。「君は卓球を始めたが、やり抜く覚悟があるか、一流選手になるのは容易なことではないぞ」といったら、「やります、必ずやります」という返事であった。言葉の通り荻村君の練習も激しいものであった。後年選世選手権をとった荻村君が西高を訪れた時この話をし、「一流選手といっても小生の考えていたのはせいぜい日本選手権どまりであったのに、世界選手権獲得とは大変な手柄をたてたもので、よくぞやった、こんな嬉しいことはない」という意味のことをいったことがある。ところが荻村君は「井の頭公園での記憶はない。それは違う」と断言した。校長室で何人かのお客様も見えていた席でもあったので、そのために恥かしい思いをしたことがある。このように小生の記憶も怪しいものであるが、井の頭公園での会話は今でも事実だと思っている。

昭和二十年代は、先生方の卓球熱も相当なもので、校内および他校との試合もよく行なわれた。思い出すとなつかしい。卓球部は先輩の結束も固く、時々の会合には小生などまで招待を受け、まことに嬉しい。世界の荻村となつて忙しい同君をはじめ、先輩諸君がしばしば学校へ足を運び、模範演技・後輩指導とつくしてくれる姿は誠に美しい。西高の大きな誇りである。今後もこのきづなを強め、先輩、在校生を含めた西卓会の発展につとめて下さることを願って止まない。在校生の部員諸君もよく練習に励んでいるようであるが、名誉ある足跡を残した先輩諸兄を見習い、卓球を通して大きな人物に成長するよう、努力の積み重ねを望む。